

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

祖父の元気が一番

島根県 江津市立青陵中学校 三学年

田向 杏

「おじいちゃん。」
「おう。」

今日もこんな会話から始まった。小学生だった時の私は、週に一回は隣の市で一人暮らしをしている祖父の家を訪れていた。しかし、中学生になってからは部活が忙しくなり、小学校中学年になった弟が習い事を始めたこともあって、父、母、弟、私の家族四人の予定を合わせて行ける日は月に一、二回に減ってしまった。それでも、大晦日から正月は毎年祖父の家に泊まり、みんなでかるたなどをして、年越しそばを食べ、鐘の音を聞いて寝るのは私の楽しみであった。

とても元気だった祖父が歩けなくなってしまったのは、三年前のことである。「狭窄症」という病気にかかってしまったのだ。祖父は入院し、背中の手術をした。以前は、弟と私と三人で走って競争をしたり、野菜や果物の栽培を楽しんでいた祖父は、杖がなければ歩けない状態になってしまった。入院時は母や親戚の人が何度も病院へ通っていたが、祖父はもちまへの元気さで、再び一人暮らしができるほど、回復した。

しかし、再び病魔が祖父を襲う。次は「大腸ガン」だ。約一年前のことであった。病名を聞いた私は、心配で心配でたまらなかった。ある日、久しぶりに祖父の顔を見にお見舞いに行った。祖父は食欲がなく痩せていた。それでも笑顔で元気を忘れず、祖父はまた、もとの生活ができるよう病氣と闘い、ついに退院できることになった。一人暮らしに戻り、心配な面もあったが、母や父が定期的に家を訪れ、親戚の人は手すりのついた新しいベッドを買ってくるなど、みんなでサポートした。祖父は今も元気に過ごし、趣味である囲碁に友達と打ちこんだり、受験生である私に将来のことについて考えさせられる大切なお話をいつもしてくれる。そのたびに祖父は言う。

「杏と優のためにもっと長生きせんとなあ。」

祖父はもっと長生きしたいと、今も菓を飲んだりしながら、不自由になつた体でも再び野菜を育てたい、動物を庭で飼いたいと、歳に負けず、いつも明るく、一日一日を大切に前向きに生きている。

第55回中学生作文コンクール

祖父が約五年の間に二回も病気に掛かったにもかかわらず、家族が治療費や入院費など金銭面であまり困らなかったのは、祖父が生命保険をかけ、もしもの時のために備えてくれたからであった。この作文を書くにあたって、私は今まで全く分らなかった生命保険に身近なところで触れることができた。父から、祖父の病気のことを聞き、それに関連した生命保険の重要さも私は身をもって知ることができた。祖父の「もしもの時のために」という考え方で、家族も助けられたと思う。おかげで、私と弟は希望の習い事ができ、今もそれに励んでいる。

私の夢は医師である。祖父からのお話にでてきた職業であり、私がか今、勉強を頑張れる理由の一つでもある。将来は、現代に合った医療を提供し、そして患者さん一人ひとりに寄り添い、多くの命を助けることのできる医師として社会の一員になりたい。今は少子高齢化が進んでおり、私の住んでいる島根県西部は祖父と同じぐらいの歳の方がとても多く、また夏休み中に体験した看護体験では、患者さんに年配の方が多くいることを聞いた。こんな時だからこそ、私は祖父や周りにいる年配の方を大切にしていきたい、困った時は手を貸すことができるようにしたいと思う。祖父に、医師となった私の頼もしい姿を見せる。そのために祖父のように何事にも前向きに取り組んでいきたい。祖父の長生きを願って。